

困難事例を困難と思わなくなる本

評者・吉岡幸子

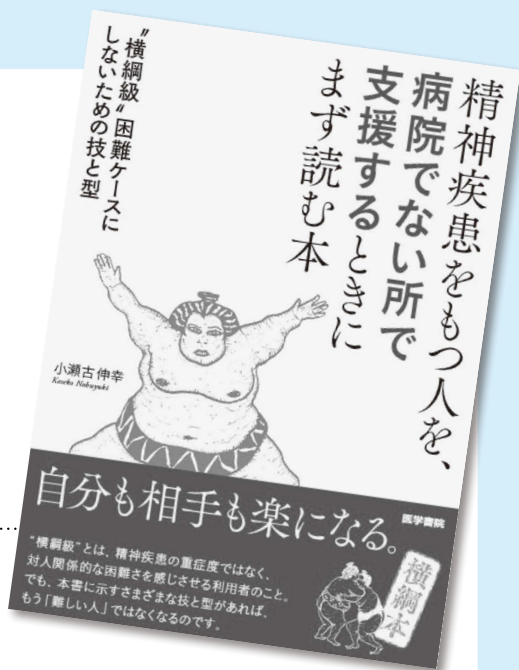
帝京科学大学医療科学部看護学科教授

精神疾患をもつ人を、病院でない所で支援するときにまず読む本

“横綱級” 困難ケースにしないための技と型

著・小瀬古伸幸／定価・本体 2000 円＋税

発行・医学書院 (03-3817-5650)／2019 年



人生 100 歳時代を迎えんばかりの日本は世界に類を見ない長寿先進国である。しかし一方で経済格差と健康との関連は明らかであり、人々の価値観も多様化する中で“生きづらさ”を抱えて生活している人も多くいると言われている。このような中で、精神疾患を抱え地域で生活している人々に対し、訪問看護は大きな役割を担っている。

本書は、精神科訪問看護ステーションの管理者の視点で、地域で精神疾患を持つ人を支える支援者のために分かりやすく書かれた実用書である。

第 1 章では、「地域というのは、病院とココが違います」のタイトルで、病院内の看護と切り口の異なる視点で具体的にその実際を解説している。ここでは“患者”と言わず、“利用者”として、医療者主体の場合と当事者主体の場合を比較し、支援方法の考え方も示している。

著者は、地域で生活している当事者から、「三大困りごととは、お金のやりくり、毎日の食事、人間関係である」と聞いている。医療者側の視

点では、精神症状との付き合い方が困りごとであろうと推測しがちであるが、訪問看護の利用者をその地域で生活する住民として捉え、思いを受け止めている様子が本書の随所に書かれている。

第 2 章では、11 人の“横綱級”の困難事例を紹介している。病名ではなく、その困難性が各項目のタイトルとなっており、それが本著の意図するところであろう。

11 人の事例には、リストカット、連続飲酒、虐待、引きこもり、暴力などがあり、支援者にとって対応が困難だった事例として紹介されているが、どれも疾患や複雑な環境などによるご本人の苦しさや伝わる事例である。とは言え、その方々を支える支援者にとっては、「技」と経験が必要となる事例である。

ここでは、事例との関わりや何気ない会話を分析し、その意図や狙い、やるべきこと、やってはいけないことを「対応の技」として解説している。1 事例ごとに複数の技が分かりやすく書かれており、保健師に

とつても“困難事例”への対応に役立つ章である。

第 3 章では、「精神科訪問看護必須の型」として、新規面接、重要事項説明書、看護計画、緊急電話、緊急訪問、救命時・死亡時対応などの“型”について解説されている。訪問看護ステーションでは、利用者との合意（契約）に基づく看護が展開されており、保健師の介入とは大きく異なる部分である。ここでは訪問看護の仕組みや回数、24 時間対応体制加算、キャンセル時の対応など、現場の保健師にも理解してほしい事項が盛り込まれている。さらに救命時および死亡時のフローチャートは秀逸であり、保健師のスキル向上のためにも活用してほしい。

本書のように、困難事例に丁寧に関わり、住民に寄り添うことができる保健師になるために、新人保健師、精神担当になったばかりの保健師、いわゆる“精神”が苦手だと思っている保健師、そしてベテラン保健師にも、ぜひ、参考にさせていただきたい一冊である。